

研究課題：高齢者の寿命に寄与する口腔保健関連因子の検討

研究者名：野村義明¹⁾、大黒英貴²⁾、岡田彩子¹⁾、花田信弘¹⁾

所属：¹⁾ 鶴見大学歯学部 探索歯学講座、²⁾ (一社) 岩手県歯科医師会

はじめに

平成9年に行われた厚生労働研究「高齢者の口腔保健と全身的な健康状態の関係についての総合研究」において、岩手県では岩手県歯科医師会を中心に716名の対象者に対して会場健診、訪問健診を行った。平成29年度には対象者が100歳に達し、80歳高齢者調査の対象者に対して生存調査を行い、80歳時点での口腔の健康状態がその後の寿命にいかに関与を及ぼすかを検討した。現在歯数の寿命への影響、80歳時点での「かめる人」と「そうでない人」の平均寿命の違いを検討した。

方法

1. 調査対象者

平成9年に行われた厚生労働研究「高齢者の口腔保健と全身的な健康状態の関係についての総合研究」の対象者716名に対して、市町村の協力により平成29年10月における生存、転出日、死亡年月日の調査を行った。

2. 調査項目

平成9年に行われた80歳高齢者の調査における現在歯数、アンケート調査における山本式総義歯咀嚼能率判定表に記載されている食品15種類に対して「かめる」、「かめない」のアンケートによる調査項目を使用した。これらのデータは8020推進財団が保管管理しているデータベースのデータであり、分析に先立ち8020推進財団からの使用許可を得た。

結果

山本式総義歯咀嚼能率判定表による「かめる」、「かめない」を因子として生存分析を行った。男性では「こんにゃく」、「ちくわ」、「ごはん」の3食品がかめない人は生存率が急激に低下した。しかし、女性では統計学的に有意差のある食品はなかった。また80歳時点での現在歯数は男性では、現在歯数が多い者の生存日数が長かった。80歳調査時点での有歯顎、無歯顎の検討でも、男性は有歯顎の方が生存日数が長かった。

結論

歯の本数は寿命に影響し、歯の本数の減少によりある種の食品がかめなくなると生存率が急激に低下することが示唆された。